



映画『遭難フリーター』監督 岩淵弘樹さん

人生に迷ってもいいから 自分らしく生きたい

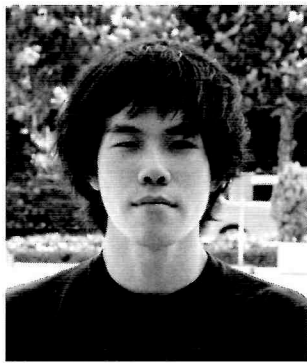
パート・アルバイト・派遣などの非正規労働者が占める割合は年々増加。特に若者の非正規比率は急激に高まっている。自らの派遣労働の日常を撮影した『遭難フリーター』監督の岩淵弘樹さんに現場の実態を聞いた。

非正規労働の現実をリアルに描く

——映画を撮ったきっかけは

高校生の頃から、何か表現したいと思い、山形の東北芸術工科大学へ進学しました。在学中に山形映画祭関連のワークショップで土屋豊さん、兩宮処凛さんと知り合い、兩宮さんに誘われてイラクへ「人間の盾」として行ったりもしました。

その後、東京に行きたい気持ちと600万の借金を返さなければいけないこともあって、2006年3月から埼玉のキャノンの工場で派遣社員として働き始めます。そこでの生活を携帯電話でブログに書いていたのですが、それを土屋さんと兩宮さんが読んで、非正規労働者の立場から見たものを撮ったらいんじゃないかと。とにかく目の前のものを記録しようとポケットに小さいビデオカメラを入れて、ふと思ったら取り出して撮ることを繰り返しました。2007年の3月まで工場働きのながら撮影し、4月、5月と実家の仙台に帰って編集。土屋さんと兩宮さんの3人でタイトルを考え、最終的に「岩淵くんの場合、自分で迷い込んでいるから遭難だ」ということで『遭難フリーター』になりました。



いわぶち・ひろき

1983年宮城県生まれ。東北芸術工科大学映像コース卒業後、製造派遣大手・日研総業からキャノンのプリンター工場に派遣され働く。その生活を記録したドキュメンタリー映画『遭難フリーター』が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2007ニュードックスジャパンに招待される。著書に『遭難フリーター』（太田出版）。『遭難フリーター』自主上映のお問い合わせ先：合同会社東風 Tel.03-5389-6605

工場現場はどうでしたか？

指示をしなければ何もできない人や、作業を全然覚えられない人、本当に「どうにかしろよ」というような人がたくさんいました。自分より年上のそういう人たちに対してすごくイラツとしたり、少し怒鳴ったりもしました。

工場の周りにはパチンコ屋とサラ金と風俗の3つがあって、皆パチンコで勝ったら風俗に行き、負けたらサラ金にいくわけです。負のスパイラルですよ。

けれども当たり前なのですが、話をするとみんな色んな人生を経ている。様々な境遇の人が派遣社員をやっている。派遣だからダメ

なんだと人生を否定した言い方はしたくないですね。派遣という働き方が悪いとは思いません。

派遣切りがあった時に「いつ解雇されてもおかしくない働き方が派遣。それを分かって働いていたはず。だから文句言うなよ」と言う人がいました。しかし実際にそこまで考えて働くでしょうか。全て自己責任だとバサツと切られるのはやだなあと思うんですよ。

自己責任もあるだろうけど、社会的に解決すべきこともある。だから自己責任と社会責任の両方だと思っています。

——派遣会社に抗議したこともありますね

僕は群馬の高崎のトレーニングセンターで2泊3日の研修を受けてから、埼玉の本庄工場に仕事に行きました。その際1日8時間研修を受けて、3日間で8000円もらっただけです。群馬県の最低賃金よりも下回っている。それ

で東堂さん（仮名）というおじさんが派遣会社に文句を言いにいった。

行く前に職場のロッカールームで「おかしくねえか」とみんなを誘うんですが、誰もとりあわない。僕は興味があったので2人で派遣会社の社員と話をしに行きました。最終的に東堂さんが「俺達は機械じゃないんだ。人間なんだ」「なめるのもいいかげんにしろ」とガツンと言ってくれたんですね。しかし多少の改善はありましたが結局、会社は最低賃金問題には触れず、僕ら2人だけに1日分の給料を出して問題を内々で握りつぶしました。

声を上げる人、上げない人、現場では本当にバラツキがあるんだと感じます。強要するつもりはないですが、みんなもう少しちゃんと考えたら働きやすくなると思います。

同世代の想いの一端を表現したい

——セルフ・ドキュメンタリーですね

撮影している当時から「ネットカフェ難民」などを題材にした番組は色々ありました。しかし語っている人の顔には、モザイクがかかっている。モザイク越しでは、誰が言っているのかも分からない。



映画『遭難フリーター』の一場面

ある番組ではモザイクのかかった「派遣労働者」が「死んでもいい」と語っていました。僕も同じ境遇にはあつたけれども絶対に死にたいとは思わなかった。だから顔を出して、自分の言葉で何か言えたらと思っていました。

他人を撮るのが苦手なこともあつて大学の頃からセルフ・ドキュメンタリーで作品を作っていたんですが、カメラを通して映った景色が、自分の景色みたいに見える瞬間があるんです。通り過ぎる電車の車窓を撮っているだけでも、ぐつとくることがあります。

そういう意味で『遭難フリーター』という映画は、純粹に僕の視点の積み重ねなんです。上映している時だけは色んなしがらみから解放される。そこが映像の好きどころです。

また映画の中で豊田道倫さんの曲を使っていますが、僕の大好きなミュージシャンです。彼のようなアコースティックギター一本での弾き語りに憧れて、そんな感じで映画を作れたらと思っていました。カメラ1個で三脚も照明もマイクも使わないような作り方です。どこまで表現できたのか分かりませんが、とりあえず『遭難フリーター』を作つて最初の一步を踏み出せた感じですよ。土屋さん、雨宮さん、色々な人に出会えたことも大きいですね。

——上映後の反応は

本当に様々です。京都で労働組合主催の上映会があつたのですが、映画の中の「デモじゃ何も変わらない」というセリフについて指摘されました。

労働組合の年輩の女性が「私たちもデモ一回で社会が変わるとは思っていない。だけどデモは少数意見や、私たちの声を届けるための大切な手段。変わらないからやらないはおかしい」と。それで「ああ、そういうもんなんだ」と気づきました。

若い派遣社員の人「自分の見たまま、感じたままの事だからすぐく共感した」と語ってくれたり、一方で「甘えるな」との声もありました。

別の上映会では、60代のある政治家が「今の若者には怒りが足りない。私たちが若い頃は学生運動で、国や社会に具体的な策を持つて対抗していた」と怒っていました。しかし若い人に怒りが無いわけじゃなくて、怒りの質が変わっているだけだと思います。それに学生運動で果たして何が変わったのか、あんまり変わっていないとの印象しかありません。

「26歳のリアル」を求めて

——次の作品を準備しているそうですが

今「28歳からのリアル」という本が売れています。それは年収1200万円をどう稼ぐかとか、結婚するには800万必要だとか、お金がないと幸せになれないと明言している極端なビジネス本です。今26歳なんですけど、読んで「俺、無理じゃん」とゾツとしました。その対極に「貧乏でもいいじゃないか、農業しよう」という本もある。

でも大多数の人はどちらでもない。挫折やチャレンジ、もしくは

何も変わらない平凡な日常でもいいですけども、本当はそこに人生の面白みや価値を見出せればと思っています。

「仕事は自己実現できる場所じゃない。我慢の量だけお金ももらって生活することなんだ」とよく言われます。でもそう割り切りたくはない。

今僕は、原稿書いたり映画を作ったりすることがすごく楽しい。これを生き甲斐にした方が良さあと思えますよ。結婚だとか、親の介護も必要ない状態なので、そんな甘つたれたこと言えるのかも少しはいいですが、もう少し人生を棒に振つてもいいのかなという気がしています(笑)。

上の世代の人からは「まったく近頃の若い者は」と言われますが、やっぱり若者には若者なりの気分や動機があります。それを分かつてもらえなくても仕方ないですが、せめて同世代が自覚したらと思うんですよ。

自分の思っていることだけに固執するんじゃないかって、何人かの同世代の雰囲気や気持ちを取り込めたら、世代的な感覚を共有して自分の中で探していけるものが広がるはず。そんなことを考えながら『26歳のリアル』的なものを書こうと、色々な人に会いに行っています。

(聞き手＝温井立央)